

足立重和著

『郡上八幡 伝統を生きる—地域社会の語りとリアリティ』

新曜社 2010年8月

伊藤 勇

本書は、「水と踊りの城下町」郡上八幡について、地元住民の「語り」と「リアリティ」に着目して、この地域社会のダイナミズムを明らかにしようとする意欲的挑戦的なモノグラフ研究である。終章で著者は、この地の人びとの「生きざま」をトータルに描き出そうとする壮大なモノグラフ構想を語っており、その地点から見れば本書は序曲にすぎないのかもしれない。とはいえ、本書はそれ自体、17年という長期のフィールドワークに基づき、随所に厚みのある記述や内在的な指摘が現われ、読み応えがある。多数配置された臨場感あるフィールド写真も大変興味深い。以下、評者が関心を引かれた点を中心に本書の内容を見ていこう。

まず本書全体を貫く視角について。著者によれば、地域社会に関する従来の実証研究では、地域の階層構造や権力構造など「構造」の解明に主眼を置く構造論的アプローチが支配的であったため、著者が注目する住民たちの「語り」は、「構造」に従属する副次的なものとなされ、「語り」それ自体が研究主題になることはなかった。これに対して著者は、これまで看過されてきた住民たちの「語り」（および「ふるまい」）こそが、「地域社会を突き動かし」、「地域共同体を維持・再生産」しているという点を強調する。つまり、さまざまな物事をめぐる日々の語り合いや相互行為を通して、人びとは物事に関する共同主観的な「リアリティ」（至高の現実感）をつくり上げ、そのリアリティに立脚して地域生活を展開していくのだという。この点で著者は、言語や言説による現実構築性を説く「構築主義」に与している。

しかし、眼前の語りに集中する構築主義的分析では、語りの「意味」やリアリティの「質」という、フィールド研究としては肝心な問題が禁じ手として封じられてしまう。著者はこれをむしろ積極的に扱おうとして構築主義から離れ、「交錯論的アプローチ」という独自の分析視角を提起する。それは、眼前の語りと、その語りに先行し語りの意味の背景として働いている出来事の連鎖（「コンテキスト」）が、図と地のように互いを明確化し合うこと（「交錯」）によって、共同主観的リアリティが産出されると捉える視角で

ある（序章その他）。

なお、こうした視角は研究当初から確立していたものではなく、構築主義から出発しつつも、調査中对象の人びとと抜き差しならない関係に陥った苦しい体験を経過し、いかに伝統文化を踏まえて地域づくりを進めるかとか、いかに合意形成しながら水環境の保全をはかるかといった地元住民にとっての切実な問題に研究者として応答しようとして、著者がたどり着いた見地だという（序章および終章）。

こうした経緯は本書の構成や叙述にもあらわれている。そのため評者は、読んでいて著者の研究軌跡を遡行する思いがする一方で、研究関心の変遷、各部各章間の分析焦点の相違や断絶（第Ⅰ部と第Ⅱ部、第Ⅱ部の6～8章と全体との関係など）に戸惑ったのも事実である。

ともあれ、こうした視角から著者は、2部構成の本論において、「踊り」と「水」という郡上八幡を特徴づける事柄に関わって、フィールドワークの中で遭遇した2つのトピックに即して具体分析を進める。すなわち、観光化した郡上おどりに対する「地元の踊り離れ」、および、長良川河口堰反対運動の展開と分裂というトピックを取り上げ、それらをめぐる「語り」を通して人びとがどのような「リアリティ」をつくり上げ信奉しているかを探るのである。

第Ⅰ部で取り上げられる「郡上おどり」は、郡上八幡のローカルな伝統文化を代表するものとして、地元住民にとって愛着や誇りの対象として価値づけられ踊られ続けてきた。その一方で、早くから重要な観光資源としても位置づけられ、観光化と呼応した加工や演出が施されるとともに、文化財化という形の制度化も進められた。そのため、著者によれば、郡上おどりについて住民が語りつくり上げる「リアリティ」には、住民自身の経験と記憶を背景に形成された審美的な感覚に基づくリアリティ（「風情」）と、観光資源および文化財としての価値を高めるべく形成されたリアリティとが併存し、住民は双方のリアリティをともに生きているのだという——これが第Ⅰ部のもっとも重要な知見である。第Ⅰ部の各章（1章～5章）では、これらのリアリティの形成史、リ

アリティを組み上げ維持するレトリック、そしてリアリティの内実が、住民たちの語りや郷土史家たちの説明の分析を通して、また著者の参与観察結果に即して詳しく検討される。その上で著者は、踊りの観光化・文化財化は地域が進んで選択した戦略ではあったが、踊りの「モノ化」は住民の間に踊りの「楽しみ」や「風情」の喪失を嘆き、ある種のノスタルジーに立脚して「本来の踊り」に立ち戻ろうとする動きを生みだした点に注目する。そしてこの動きに、「観光化とは異なる価値形成的な地域づくり」の方向性が見いだされると評価する。なお、こうした注目と評価に合わせて著者は、観光人類学等で有力な「文化構築主義」（構築された伝統の虚構性・非真正性の暴露・批判に終始する立場や、観光化の文脈で戦略的に伝統を創造・活用する地元の主体性を称揚する立場）等への批判を展開しているが、それは「郡上おどり」の具体的知見に即して提出されているため、説得力がある。

後半の第Ⅱ部では、長良川河口堰反対運動における行政（建設省）と住民のディスコミュニケーション（6章、7章）、町長選挙への対応をめぐる生じた反対派住民内部の分裂（8章、9章）が取り上げられ、前者については主に行政側のレトリックの分析が、後者については選挙賛成派の「住民」としての成員性を剥奪していくカテゴリー化実践の会話分析が取り組まれている。これらは、それ自体としては、環境問題をめぐる公論形成の困難性や環境運動内部の意志決定の問題について、会話分析的アプローチからの一定の寄与を示すといえようが、序章で宣言された本書全体のテーマに照らせば、やはり落ち着きが悪いといわざるを得ない。

本書全体のテーマに関わって重要なのは、運動分裂の原因を探るなかで著者がその存在に気づき、「町衆システム」と名付ける郡上八幡に固有の意志決定システムについての指摘である。それは、経験知のある者（町衆）とそうでない者（若手）との序列・階梯を認めつつ、両者の密なやりとりから「住民全体にとって的確かつ創造的な意志決定を可能にする」合理的なシステムであり、「ローカルな公論を導く社会的仕掛け」なのだという（257-258頁）。そして、こうした合意形成のしくみを踏まえてこそ、地域の環境保全ははかられてきたし、地元と外部市民が協働する環境運動も可能となるのだと著者は結論する。この辺りは書き方がやや断定的なきらいはあるものの、興味深い指摘だと思う。

最後に、本書を読みながら著者にたずねたいと思っ

たことを書き記したい。第1は、著者の言う「交錯論的アプローチ」について。これを評者は、地域社会の動態に関して、著者が郡上八幡というケースに即して提出した一種の説明モデルと解した。そして、第Ⅰ部で取り上げられるようなローカルな伝統文化をめぐる、住民がつくり上げた共同主観的リアリティに根ざして地域生活や地域づくりを展開していくプロセスを、内在的に描写・説明する上では斬新かつ有用なモデルだと評価したい。しかし、ある地域社会がどう動くかを大づかみにでもトータルに描写・説明するにはやはり、これだけでは十分なのではないか、より多角的複合的なモデルが必要なのではないだろうか。そしてそこでは、著者が批判する構造論的アプローチも含めて、多様な理論・方法の動員が必要だと思う。こう評するのは、モノグラフ研究を標榜している著者のモノグラフ観と評者のそれとが食い違うからであろう。

終章で著者は当地でのモノグラフ研究の意義として、郡上八幡の人びとの「生きざま」から、「みんなで生活することを“楽しむ”共同性」等の新しい生き方へのヒントを引き出すことを挙げる。当地への深い参加者的調査を続ける著者の発言として尊重したい。しかし、モノグラフというからには、やはりその中心的な目的・役割は、当該社会について具体性を備えた全体的把握、全体像の提供に置かれるべきではないだろうか。そしてそうした見方と報告が当地の人びとにとっても資するところがあるのではないだろうか。

第2は、「地域づくり」について。本書は、「地元住民のなかから内発的に生まれた地域づくりの方向性」（116頁）を探ろうともししており、観光化と異なる方向での伝統文化によるまちづくり（第Ⅰ部）、地域固有の合意形成システムを踏まえた環境保全（第Ⅱ部）など、郡上八幡の事例に即して一定の示唆を引き出していると評価される。著者にとっては、これをいっそう展開して、地域の共同生活の豊かさとは何かを追究することが重要課題と位置づけられているように見える（終章など）。とすれば、その際にはぜひ、「村研」を含め、地域における共同の意味を実証的に考究してきた日本の村落研究との対話を求めたい。また、近年の「地元学」的な発想に基づく地域づくり運動についても、それが、なにげない、ありふれた地域の生活文化や環境の価値を再発見し、観光化や資源化にこだわらない地域づくりを目指しているだけに、著者の見解・評価を聞いてみたいと思うのである。（福井大学）